

高校商業教育におけるキャリア教育の実践に関する研究

A study for practice of career education in commerce high school

上 野 和 久

Kazuhisa UENO

(和歌山県立和歌山商業高等学校)

佐 藤 史 人

Fumito SATO

和歌山大学教育学部

2008年10月3日受理

Abstract

Business communication skills, expected to be acquired in commercial education, do not appear to be improved enough in the present professional curriculum in commercial senior high schools. In order to enhance these skills, a series of classes called “Business Manners” was carried out as part of the “Elective - topic course” so that students could learn manners, rules, and professional behavior patterns.

In this study, “Business Manners” is regarded as part of career education and examined from the point of view of on-site training, aiming to seek potentials for career education in commercial high schools in the future.

キーワード：高校商業教育 キャリア教育 徳性 信頼関係 ビジネスマナー

1. 本研究の目的

本研究は商業教育において重視されてきた徳性の涵養について概観し、これを現代の高校商業教育で実践することを試みた。具体的には商業科目の総まとめの科目「総合実践」で学ぶことができない「道徳的意識の育成」を担保するため、キャリア教育の観点からマナー学習の授業実践を試み、その効果や意義について検討することを目的とする。

2. 教育目的としての徳性の涵養

近代教育の目的は人間形成、とりわけ徳性の涵養を中心とする全面教育(人間の内面形成)を意味していると堀尾輝久は指摘している¹⁾。この徳性の涵養は同じく教育の目的である知育とは区別され、より重要とされた。人間の内面形成は「私事」であり、国家権力の干渉が及ばない問題とされた。しかし、帝国主義段階の国家における教育においては、人間としての徳性の涵養から国民としての徳性(国家への忠誠心)の強調へと変化した²⁾。しかし中内敏夫が指摘するように、戦後、教育はそれを受ける子どもの権利として、あるいはそれを社会や国家が保障するための義務として捉え直され、教育は子どもが主権者として発達することを促進する営みであり、子ども一人ひとりを尊重する立場へと変わってきた³⁾。このように現在の教育における人間形成の重要性はいうまでもない。

ところで、職業教育は特定の職業に就くための準備教育としての役割も持ち合わせるので、当該分野の職業に関する専門的な知識や技能の習得がその目的とな

る⁴⁾。商業教育では、例えば商法・マーケティングなどに関する知識の理解やそれを実際に使いこなす技能がこれに相当する。こうした職業教育ゆえの目的もある。さらに、商業教育では他の職業教育とは異なる側面がある。商業教育では当該分野の知識・技能の習得と同様に「徳性の涵養」それ自体が商業教育の固有の目的とされ、学校教育における商業教育が確立される当初から主張されてきた。

例えば1899年文部大臣樺山資紀は全国商業学校長協会の会合で中等商業教育の普及を目指して以下のような訓示を行っている⁵⁾。

「徳性ノ涵養ハ一般教育ノ根底ニシテ教育者ノ一日モ忘ルベカラザル所ナリ、殊ニ商業ハ徳義上ノ信用ヲ以テ基トス、信用ヲ外ニシテ商業ノ発達ハ決シテ望ムベカラズ」

この訓示は当時の教育の役割に鑑みて国民教育としての徳性の涵養が主な目的であり、それを具現化したものであろう。しかし、その一方でこの訓示の意義を「国際市場にのりだす際の商業上の徳性の養成を教育に期待した」⁶⁾との見解もあり、商業教育において徳性の涵養は重要な内容であったことも窺い知れる。

商業教育も教育全般に包摂されるから前述の教育全般の目的は共通にしていることはいうまでもない。加えて商業教育における徳性の涵養は職業教育としての側面からも位置づけられ、商業教育にとっては二重の意味で重要であったことが分かる。

3. 商業教育の内容としての道徳

(1) 商業道徳

商業は、古くは「商い」ということばで現されていた。語源辞典によると「商い」とは、「売買すること。商売。売り上げ」という意味である。語源としては「農民の間で収穫物や織物などを交換する商業が、秋に行われたことから『秋なふ』から動詞の『あきなふ』が生まれ、『あきない』ともいわれている。

「商業」は、収穫物や織物などの物々交換から、モノと貨幣の交換へと社会が発展し、今日では情報やアイデア、信用などの実態がなくとも価値あるモノの取引が行われるようになった。こうした取引の基本には、「売り手」と「買い手」が存在する。この両者の関係には、「売り手」は「買い手」の立場を理解しつつ商品を売ろうとする。「買い手」は、「売り手」の言葉から品質や価値を信頼することにより、商取引の信頼関係が成り立つ。この取引関係は、別の見方ですれば「商品などの価値あるモノを両者(売り手と買い手)の間においた人間関係」である。「売り手」に対しても、「買い手」に対しても信頼しうる人間性を備えていることで、「信頼関係」が成り立ち、売買は成立する。近江商人は「三方良し」という「売り手良し、買い手良し、世間良し」という「商いとしての信頼関係のルール」を明確に表現している。この考え方は近江商人の商業道徳であり、今日の企業の社会的責任においても一顧に値すると考えられる。

商業の基本である商取引に関わって信頼関係が重視されることは、商業教育の内容に道徳的意識の育成が含まれる必然性を生じさせた。加藤春男は、「商人自ら一般社会の誤解に陥ることが最も恐ろしい。商業の価値機能を十分に会得せしめて「商人としての自覚」を与えることができるようにすべきである。この自覚を与える事が商業教育における訓育の生命でなければならない」と説いて、「商人としての自覚」すなわち人づくりを商業教育の内容とすべきとしている⁷⁾。

(2) 専門的知識と技能との関係

商業教育は職業教育のひとつであるから、その教育内容は商業活動に必要な専門的な知識と技能が含まれる。これに関しても小樽高商初代校長である渡辺竜聖が以下のように述べている⁸⁾。

「財政、金融、交通、保険、民法、商法、簿記、商算、語学等雑多なれども何れも商業学其の物ではなく、・・・(中略)・・・然かもこれらの諸学科には何等統制なくして、いわば群雄割拠の状態で統一は無い。然るに商業実践を課することによって、始めてこれらの諸学科を総合統制し得る。端的に言えば商業実践即ち商業学其の物である」と説き、加えて「実践室に於いて商人に必要な勤勉、信用、機敏、協調等あらゆる道徳を修めることが出来る」と言う。

すなわち、商業教育の内容は商業に必要な知識を学

問分野や実務に従って構成されたものではなく、それを統合する科目として「商業実践」が位置付くことを指摘している。さらに、実務教育が単なる実務教育に終わらず、実業人としての知識・技能を修得するだけでなく、理論を深め、道徳を形成するという指摘をしており、注目できる。

以上のように、商業教育においては職業的・専門的内容を担保すると同時に、その内容の特性から人づくりや道徳性が重要な位置を占めていることが分かる。

4. 現在の商業教育

今日の高校商業教育における実習科目「商業実践」は、1978年高等学校学習指導要領改訂で「総合実践」と名称を変えた。1999年改訂では、この科目の目標を「商業の各分野で学んだ基礎的・基本的な知識と技術を、実践的、体験的な学習を通して総合的に修得させるための科目」⁹⁾とした。

また、「第2 内容とその取扱」において、(1)流通ビジネスに関する実践 (2)国際経済に関する実践 (3)簿記会計に関する実践 (4)経営情報に関する実践の4項目で構成され取扱いについても「各分野の特色に応じた体験的な実践を取り扱い、学んだ知識と技術を総合的に応用できるようにすることが大切である」¹⁰⁾と示された。

しかし、従前の「商業実践」で謳われていた「道徳的意識を育てる」ということについては、学習指導要領の科目「総合実践」の目標・内容・取り扱いにも記載されなかった。このことは、商業教育の根幹である「人づくり」という視点を希薄化させ、高校商業教育で重視してきた社会規範、マナー教育、職業観、勤労観を育成する力¹¹⁾が不十分となることを予想させる。

今日の高校商業教育の実習科目「総合実践」を見ると、商業の学習内容の広がり、それに伴う教材量の増加、生徒の学力低下等見られるのが現状である。これは、教員においても生徒においても知識と技術の会得のみで精一杯の状況であり、商業教育を通じての道徳的意識の育成にまで、教育内容、方法ともに迫っていないことを意味する。

「商いとしての信頼関係」をつくるには、基本的なコミュニケーション能力が必要である。コミュニケーション手段は言語(声)や文字、態度や行動などさまざまな手段で意志や思いを伝えるが、「商業」では専門的な言語も用いて、そのコミュニケーション機能を高めている。高校商業教育でのコミュニケーションを考える時、自然言語(日本語や英語)・人工言語(情報処理言語)・会計言語(簿記会計)の三言語(II)を使いこなせる能力が必要である。

特に、人間の社会基盤は経済で動いており、その経済の仕組みを知っていくためには、会計言語を理解しておかねばならない。民族をこえて喋る自然言語や国

境をこえて喋る人工言語は、大切なコミュニケーション力であるが、商業の中では、会計言語が特に意味のある言語(コミュニケーション)である(11)。高等学校で会計言語を学習する科目は「簿記会計」であるが、この科目の機能は、貨幣価値でモノの流れをあらわすために、記録・計算・報告するところにある。例えば、帳簿に「(借方)仕入 1,000,000 (貸方)現金 1,000,000」記載すれば、「当店は商品1,000,000を現金で仕入れました」ということを他者に情報伝達している。このように会計は「取引」の裏付けのもとに機能するものであり、人間と人間の関係性であり、コミュニケーションそのものである。また、「平成19年度損益計算書・税引前利益が、9千万円です」と言えば「平成18年4月1日から平成19年3月31日の間で、本年度の法人税・住民税が差し引かれていない利益が9千万円です」と言う意味に翻訳できる。会計言語は効率的なコミュニケーションとして、企業・事業体の社会的信用を得るために多くの人々に情報を伝達する機能を持ち、社会と企業をつなげる根幹となす言語である。このようにコミュニケーション言語としての会計言語を使う専門家は社会的責任を負い、その社会的道徳性を持っていなければならない。

高校商業教育は、将来の会計専門家として、会計数値、会計項目を的確に処理し、真実で、信頼しうる仕事をするために、人と人とのコミュニケーション能力が必要であり、その能力を育てる人間性と社会的道徳性が必要である。

農業・水産は自然に働きかけ、工業はモノに働きかけ、商業は人に働きかける特性がある。別の言い方をすれば、農業・水産は自然との関係であり、工業はモノとの関係であり、商業は人との関係である。すなわち、商業は人と人との関係であり、人と人とのコミュニケーションが特徴であると言えるだろう。

商業の各分野で学んだ基礎的・基本的な知識と技術を、実践的、体験的な学習を通して総合的に学ぶ科目が「総合実践」である。この科目の学習指導要領には、人間と人間の関係や相手を思いやるコミュニケーションなどの教育内容は明記されていない。従って、課題研究などの商業科目を総合的に学ぶ科目において、人間と人間の関係(コミュニケーション)や他者を尊重する関係性を育てることに意味があると考ええる。具体的には、「挨拶」や「言葉遣い」、「他人の話を傾聴する態度」、「服装」、「作法」などの基本的なマナーを学習させ、「商業を学ぶ生徒」の人間関係能力を育成することである。

これらの基本的なマナーが身につく、よりよいコミュニケーションが生まれることで、商取引の基礎が築かれる。この基礎の上に、会計言語を活用できれば効率的な取引関係を促し、人工言語を駆使すれば、情報社会での多くの人への大量の情報伝達が可能となり、

取引効率が促進され、コミュニケーションの高度化が図れる。換言すれば、「商業」は、人間と人間の関係性が基本となり、それがコミュニケーションの高度化につながる。この人間関係をなくして、会計言語も人工言語も活用できないのである。よって、この人間関係の形成するために、道徳性の涵養が商業教育の特質といえよう。

5. キャリア教育との関連

文部科学省は、1999年5月に「高校生就職問題に関する検討会議」を発足させ、生徒の進路意識等をめぐる問題や就職に係る制度・慣行の改善について、2001年2月に報告書を公表した。また、厚生労働省と共同で「高卒者の職業生活の移行に関する検討会議」を発足させ、新規高卒者の就職支援の在り方等について検討し、2002年3月に最終報告を行った。こうした一連の動向は、高校卒業後の就職困難や生徒の意識・意欲等の低下を背景として、進路を選択決定する能力・態度の育成が高校教育の課題として重視されてきたことを表している。

具体的な取り組みとしては、インターンシップ制度の拡充や職業安定機関との連携による職業紹介の施策などが提案され、実行されてきた。また、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」「勤労観、職業観を育てる教育」¹²⁾とされるキャリア教育は高校教育に限らず、学校教育に不可欠な内容と位置づけられるに至っている。

こうした動向に先立ち、1995年3月にいわゆる「スペシャリストへの道」報告¹³⁾では、生涯にわたる職業能力開発の向上が必要となる時代においては高校職業教育は「スペシャリストへの第一段階」であると位置づけ、それまでの「職業高校」を「専門高校」と改称した。この報告では同時に、「職業生活に必要な基礎的な知識・技術の習得」「しっかりとした勤労観・職業観の涵養」が必要であるとも指摘しており、これはいわば後のキャリア教育の先駆けともいえる提案であった。このように高校職業教育におけるキャリア教育の実践が望まれる状況となってきた。

そこで本研究は、高校商業教育における「総合実践」によって十分担保できない道徳的意識を育てる取り組みを、キャリア教育を通じて実施することを企画した。

6. 授業実践

授業実践実施校は、2年次で3日間のインターンシップ体験を実施している。この2年次で実施するインターンシップは学年行事として、5時間程度の事前学習をして実施している。今回は、3年生課題研究「ビジネスマナー」を通じての再体験インターンシップである。この再体験の授業は、詳細に構造化した目的を

設定した授業実践ではないが、総合実践のように模擬体験をさせるだけでなく、課題研究「ビジネスマナー」学習を通しての、学校外の場における実体験で学ぶ意味を確認したい。

この課題研究は、生徒の多様な実態に応じて個々の生徒の特性や進路希望などに即した教育活動を、一層適切に進めていくことの必要性や、問題解決のための継続的な学習を図ることをねらいとして、前回の改訂(平成6年実施)で設けられた科目である。

授業実践実施校では、大学や専門学校への進学者が70%を超え、生徒の進路が多様化するとともに、生徒の興味・関心に応じる科目が必要であった。そのような背景の中に、生徒の興味・関心がある課題研究の12講座を開設した。開設した講座は、「簿記研究」、「中国語」、「秘書ビジネス」、「商業デザイン」、「社会福祉」、「観光」などであった。今回の授業実践を試みる講座は「ビジネスマナー」であり、その授業内容は以下の全20回のテーマである。

- 第1回 「1分間スピーチでの自己紹介」
- 第2回 「意識と身体について・後出し負けジャンケンゲーム」
- 第3回 「トラストワーク」
- 第4回 「イメージワーク 小石の人生」
- 第5回 「来客応対のための言葉と態度」
- 第6回 「会釈、立つ、座る、歩く、身のこなし・呼吸を意識する」
- 第7回 「情報伝達の基本・ほうれん草」の経験と「事実と想像」
- 第8回 「アイコンタクトによるコミュニケーション」
- 第9回 「相互通行のコミュニケーションと電話対応」
- 第10回 「実習 レストランにおけるテーブルマナー」
- 第11回 「進路選択・選びのプロセス(1)」
- 第12回 「進路選択・選びのプロセス(2)」
- 第13回 「創造力を開発するKJ法とブレインストーミング」
- 第14回 「ミニ・エンカウンター 自分を振り返る」
- 第15回 「コミュニケーションの基礎を英語で体験する」
- 第16回 「ポジションチェンジ・客観的に自分を見る」
- 第17回 「職場体験学習前のオリエンテーション」
- 第18・19回 (2回連続)
「職場体験学習 (和歌山マリーナシティ)」
- 第20回 「1年間課題研究ビジネスマナーを振り返りスピーチ・レポート作成」

特に、第10回「実習 レストランにおけるテーブルマナー」と第18・19回(2回)「職場体験学習(和歌山マリーナシティ)」の2テーマ(取組)を授業の柱とし、他の17回のテーマを設定した。この2回の実習について「商業における特有のコミュニケーションの育成」について焦点を当て紹介をする。

(1)第10回「レストランにおけるテーブルマナー」

授業の目的は、①「レストラン」でのマナーを身につけることの意味。②お店(レストラン)の「場の雰囲気」をつくるコミュニケーションに気づく。③スタッフの高い職業意識と働く姿勢を見る。④ソムリエという資格取得とその活用を知る。以上の4点において実施した。

実習場所のレストランは、毎年インターンシップを依頼しているレストランオーナーの協力を得た。お店のランチタイムの後に、ハーフコースのフランス料理を出してもらい、生徒のマナー体験を実施した。

テーブルマナーの実際の体験に入ると、一人ひとりの座る椅子と椅子の間は一定の距離があり生徒同士は不安な様子であった。しかし、生徒同士が話できない状態であることが、高級レストランという精練された空間を生徒の五感で感じさせ、食事の味と高級レストランの空間と時間を体験できたようである。そのような雰囲気の中でレストランスタッフが料理の配膳をテキパキと行いつつ、生徒28名に対しての丁寧な言葉かけ、分かりやすいマナー指導を行うスタッフ姿を生徒たちは身をもって感じていた。

次に、このレストランの「場の雰囲気」がさまざまなコミュニケーションでつくられていることを、次の出来事から生徒は学習できた。テーブルマナーのコース料理をスタッフが配膳している最中に、生徒の一人がナイフを落としてしまった。前もって想定されていたかのように、スタッフは素早く、何気ない動作で「代わりのナイフ」を用意し、そして、落とした生徒に「大丈夫です。楽しく食事してくださいね」と話しかけた。これを見ていた生徒達は、スタッフの言葉かけや仕事への真摯な姿勢を身近で見ることができた。職業人としての行動様式は、言葉で伝えるコミュニケーション以上のコミュニケーションが必要であることをこの場面で認識できたようである。

コース料理の最後に、スタッフの一人が、生徒達のために、昨夜遅くまで時間をかけ作った、レストラン自慢のデザートテーブルに出した。その美しさと技術の高さに生徒も感激をしていた。このように女生徒の多い参加者の好みを読んだコース料理の演出は、高級レストランの雰囲気と顧客満足に徹する姿勢を感じさせた。このレストランのスタッフの一人ひとりが持つ仕事に対する誇りが、専門技術と高い職業意識を創り上げ、レストランの価値を上げるコミュニケーションを創っていることを見せた。

実習の最後に、ソムリエの資格をもつ女性スタッフより、資格をもつ意味とその活用について話した。その講話内容に聞き入る女生徒は、女性の自立や女性の社会での成功例として聞き、「女性の生き方」のモデルとなるものであった。

(2)第18・19回(2回)

「職場体験学習(和歌山マリーナシティ)」

第10回「レストランにおけるテーブルマナー」は「サービスの提供を受ける側」の体験をすることが目的であった。逆に、今回の「職場体験学習(和歌山マリーナシティ)」は「サービスを提供する側」の体験に重きを置き、商業教育を学ぶ生徒として必要なコミュニケーションを活用できることを目的とした。

生徒28人を和歌山マリーナシティ内にあるポルトヨーロッパの遊園地施設(運営スタッフ)、観光市場の黒潮市場(販売業務)、テーマパーク内ギフトショップ(販売業務)で2日間(土曜日・日曜日)の職場体験学習を実施した。

ポルトヨーロッパの遊園地内施設では、観覧車、ジェットコースター、アトラクションホール、グッズ販売等の運営補助を行った。非常に混雑している中で、安全で秩序ある運営、迷子対応や施設案内、その他トラブル処理を行う業務を行った。

観覧車やジェットコースターの運営業務は複数配置で互いに助け合い行っていた。しかし、乗降補助では丁寧な対応をしていたにもかかわらず、「頭の下げ方が雑だ」とお酒を飲んでいる入場者にクレームをつけられたり、「子ども二人で乗せて大丈夫だろうか」と母親に相談され、返答ができなかったりする場面があった。

また、迷子を見つけ対応の場面もあった。この時に、子どもと目線を同じくして、落ち着かせた後に案内所までつれていき、必要な情報を伝え他のスタッフに誉められたという。

また、海産物を中心に販売する黒潮市場にて、店先でマグロの解体を見せながら、その横で解体したマグロの切り身を販売するために、大きな声で客を呼び寄せる生徒の姿に、専門スタッフからは「即戦力だよ、ありがたいね」という言葉が聞かれた。

しかし、この生徒も初日に客からのクレームを受け、2日目の職場体験学習に参加することを躊躇する出来事があった。それは、実習初日に、マグロの切り身を販売しようとした時、客が殺到したため注文順にお金と商品を引き替えることができず、客の勢いで順番を飛ばして一人の客に「マグロのブロック」を売ってしまった。この時、他の客より厳しいクレームを受け、他のスタッフにうまく対応してもらった経験があった。この生徒は2日目も同じ売場に立ち、初日と同じ場面になっても、うまく処理していた。

次に、テーマパーク内のギフトショップで販売業務にあたる生徒は、連休の大混雑でオリジナル商品やグッズの品名も単価も暗記していない状態で、最初は接客もおどおどするばかりであった。生徒は昼休憩の間に、スタッフから借りた商品一覧表を、昼食抜きで暗記したという。

そのような努力をしている生徒を観察していたスタ

ッフが、初日終了時に翌日の商品陳列のレイアウトを考えてくるように指示した。生徒は自分の努力を認めてくれたスタッフに信頼感と尊敬する気持ちが生まれ、翌日の業務に自信が持てたという。

7. まとめ

(1)「ビジネスマナー」から学ぶ「コミュニケーション」の意味

高級レストランでの体験は、素晴らしい食事ができると同時に、特別な時間と空間を楽しむことができることであり、既存の学校教育の活動・授業では体験できないものである。

体験のふりかえり授業で、生徒たちの感想も、そのような特別な空間と時間が、ルールやマナーで作上げられ、レストランでの食事を引き立たせているという感想を話してくれた。しかし、肌で感じる経験もあるが、マナーそのものが身についたとは言えない。

生徒たちのキャリア教育のために今回の授業を設定したものであり、生徒達がいつも行くファミリーレストランやファーストフードと、高級感のあるお店の違いを実体験から理解させ、レストラン経営者やスタッフの苦勞、創意工夫を生徒の五感を通じて感じさせたところに校外体験学習の可能性がある。

(2)授業実践実施校で取り組んだ意義

課題研究「ビジネスマナー」での取組が、後の授業実践実施校でのいくつかの影響を与えた。具体的には、教員がコミュニケーション学習の重要性に気づき始め、課題研究や総合実践で取り組み始めた。

より積極的なコミュニケーション学習に取り組むために、学校行事として3日間のインターンシップを実施していた取り組みを、総合学習「職場体験学習の時間」として教育課程に位置づけ、インターンシップの事前学習として実施することになる。

(3)商業教育とキャリア教育の関連

職業教育のひとつである商業教育は、生徒のキャリア形成を本質的な目的としている。加えて、商業教育には徳性や道徳の涵養がその専門性と関わって重要であることから、キャリア教育においてもその側面に着目することは必然性がある。本研究で取り組んだように、商業教育において徳性や道徳性を重視する教育実践は今後の高校商業教育のキャリア教育のあり方を検討する際の基礎に位置づくるものである。

謝辞

本研究は、和歌山県教育委員会の協力のもと和歌山大学教育学部・県立和歌山商業高等学校・関係学生、院生の三者による「和歌山大学三者協働研究事業」の一環として調査研究した成果の一部である。最後に関係各位のご協力・ご指導に謝意を表する。

注

- 1) 堀尾輝久『現代教育の思想と構造』p.9 岩波書店 1992年
- 2) 前掲同書 p.131
- 3) 中内敏夫『教育学概論〔第2版〕』p.29 有斐閣双書 1982年
- 4) 佐々木享『職業技術教育』『現代教育学事典』p.435 労働旬報社 1988年
- 5) 文部省『日本近代教育百年史 第九卷 産業教育1』p.462 国立教育研究所 1973年
- 6) 前掲同
- 7) 加藤政男『商業教育論』p.70 同文館 1925年
- 8) 小樽商科大学「緑丘 50年史」p.31 小樽商科大学 pp.11-12
- 1962(古室俊行「経営シミュレーションモデルの設定」北海道情報大学紀要 第7巻 第2号 p.2 1989年)
- 9) 文部科学省「高等学校学習指導要領 商業編解説」p.12 1989年
- 10) 前掲同書 p.14
- 11) 加藤寛「じっきょう商業教育資料」No53 通巻341号 p.3 1999年
- 12) 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会報告書」文部科学省 2004年1月
- 13) 「職業教育の活性化方策に関する調査研究会議(最終報告)」1995年3月8日